

介ケースが多くなってきており、当センターの認知度とその役割への期待の高まりとも考えています。就労相談以外にも、生活面の相談や、家族介護の問題や手帳取得に躊躇する等、訓練や就労に展開しないケースもあり、他の専門機関へ斡旋となることもあります。また、支援学校や、専修高等学校卒業時に、適切な進路指導・就労支援が受けられないまま就労した方の中には、職務内容・勤務条件と本人の障がい特性や職業適性がミスマッチな方もおられ、わずか半年で退職となったケースもありました。

一方、企業への相談支援としては、「働き続けたいけれど、企業の配慮だけでは雇用安定につながりにくい人」への支援について、従業員への指導・育成はあくまでも企業の雇用責任という大原則を共有した上で、企業と就業・生活支援センターが協力しながら、その対応方法を企業自身が考え、見つけ出せるように、相談と助言にあたりました。その結果、障がい者雇用の上で発生するさまざまな課題について、企業や事業所が自立的に対応するようになり、その後の雇用及び就労の継続に繋がっていく、本来の企業と就業・生活支援センターの役割分担ができるようになりました。

これまで、当センターでは無理な就労展開はせず、定着支援に力を入れてきました。本人の状態に合わせて、時には本人の希望から、一旦遠回りすることになったとしても、本人と正面から向き合い、対話しながら慎重に就労への展開を進めてきました。また定着に向けて事業所との連携も密にしてきました。その結果、企業側においても、自立して雇用管理できる所が多くなり、必要に応じて定着訪問等で職場定着にあたるようにしてきました。

【福島育成園】

福島育成園は、生活介護(定員100名)と施設入所支援(定員40名)の障害者支援施設です。

近年、利用者の加齢に伴う身体機能の低下など、老化の傾向が多く見られるようになり、医師や看護師、栄養士等との相談のもと、安全に過ごすことができるよう、食事内容や支援内容の検討を行いました。

また、大阪市危機管理室や福島区役所市民協働課、福島区地域自立支援協議会等と連携をし、施設および区域の障がいのある方を含む、要援護者の防災、避難対策のため、福祉避難所の認定を受けることにしました。社会福祉法人として、また、手をつなぐ親の会の運営する施設として、有事の際には支援が必要な人に対して、必要な支援が提供できるように、常々心掛け

ながら、29年度以降につきましても、施設及び各種事業の運営にあたります。

生活介護では、個別支援計画をもとに、快適に活動に参加することができるよう、食事提供、排泄、身だしなみなど、個々に合わせた支援を行いました。利用者には、一人ひとりの特性に合わせ、荷物運び、シーツ等の洗濯、お茶の準備などの役割を担ってもらい、取り組んだことに対しては良い評価を行い、それが意欲や励みになるような支援を心がけました。これらに加え、自分たちが仕上げた商品を業者に納品するのと同様、社会との繋がりを感じるようにも心がけました。また、利用者の希望に少しでも近づけるような取り組みとして、28年度も継続してエアロビクス、書道、クラフト、陶芸、健音体操などのクラブ活動を月に1回実施し参加する機会を提供しました。

一方、施設入所支援では、安心安全に過ごすことができるよう、入浴、食事、排泄、着替えなどの日常生活が快適に過ごせるように支援をする一方で、健康管理などにも配慮し、個々に対応した支援を行いました。さらには、入浴時や食事中に重大な事故が発生しないよう、緊急に対応ができるように支援員の体制を整え、全職員が救急救命講習を受講しました。

給食提供については、毎日の食事が楽しくなるような雰囲気づくりを行い、季節を感じるような食事の内容に努めました。また、その日の体調などにも配慮しながら栄養管理を行い、利用者一人ひとりの体調や疾患に対応した食事の提供を行いました。

地域に対するアプローチとしては、積極的に連携を図り、社会貢献にも取り組みました。地域のサロンや盆踊り運動会などの地域行事に利用者と共に参加し、地域の皆さまとの交流を図りました。地域における社会資源として地域の方との交流を深め、理解と協力を得られるように努めました。また、年末防災活動の拠点として施設を利用していただきました。

【ビーンズ】

ビーンズでは利用者16名に対し、福島区内の3住居でグループホームの事業を行っています。

利用者本人が安心して心豊かに過ごせるように、生活支援員・世話人を始め、区障がい者相談支援センターとの連携も図りながら、個々の利用者に応じた支援を行いました。そして、高齢となった利用者に対してはグループホーム内の段差の解消、階段の滑り止めや手すりの設置等、安全に生活を送れるよう住環境を整えました。